

## 超高齢社会における東京のあり方懇談会（第2回）

平成30年3月9日

**【堀計画担当課長】** それでは、定刻になりますので、これから第2回の超高齢社会における東京のあり方懇談会を開催いたします。本日は、皆様、大変ご多忙のところお集まりいただきまして、ありがとうございます。会議の事務局を担当しております、政策企画局計画部の堀でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、配付資料の確認をさせていただきます。クリップでとめてある資料が資料1から7になります。このほかに東京都の総合計画である「2020年に向けた実行プラン」及び本年1月下旬に発表しました『『3つのシティ』の実現に向けた政策の強化（平成30年度）」を配付してございます。ご確認をお願いいたします。冊子が2つと、クリップどめした資料が添付される形になってございます。よろしいですか。

なお、本日出席の委員の中で、堀田委員につきましては、所用のため、遅れて入られます。また、園田委員におかれましては、本日所用によりご欠席の連絡を頂戴してございます。

それから、本日はゲストスピーカーとして3名の方にご出席いただいておりますので、ご紹介させていただきます。まず、認知症フレンドシップクラブ理事、徳田雄人様でございます。

**【徳田氏】** よろしく申し上げます。

**【堀計画担当課長】** UDS株式会社代表取締役、中川敬文様でございます。

**【中川氏】** よろしく申し上げます。

**【堀計画担当課長】** 株式会社グランドレベル代表取締役、田中元子様でございます。

**【田中氏】** 田中です。よろしく申し上げます。

**【堀計画担当課長】** なお、本懇談会は公開で行いますため、傍聴の方や報道関係者の方も出席されていますこと、また、配付資料、議事録につきましては、後日ホームページで公開いたしますことを申し添えます。

それでは、以降の議事進行につきましては、鈴木副座長をお願いいたします。

**【鈴木副座長】** 皆様、本日はお忙しい中をご出席いただきまして、本当にありがとうございます。この懇談会でございますけれども、知事の主導のもとで、超高齢化に向けた

東京都の施策を考えていこうというようなものでございますけれども、珍しく結論があらかじめあまり決まっていなくて、自由闊達に結論なき会議ということでございます。どのようなプレゼンとか議論をしたらいいのか、お迷いの方もいらっしゃると思うのですが、本当に筋書のないものでございまして、私ども、予算が3月末に通りますと、4月から8月ぐらいにかけて、翌年度の新しい施策を色々各局が考えるという段取りになっておりまして、それに向けて今日は色々議論をする。何か方向をまとめるという気はありませんので、自由闊達にご議論いただきまして、なるべく多くのキーワードとかコンセプトを残していただいて、それを基に、後ろに各局の皆さんが今いらっしゃいますけれども、色々な施策を考えていくという、我々業界用語で足跡を残すなどという言い方をしますけれども、そのような色々な議論の広がりをおのまま残していただくような形で、自由に議論できればと思っております。

それでは、本日の議事の進行でございますけれども、まず3名のゲストスピーカーにそれぞれご講演いただきまして、15分ずつご講演いただきまして、お一人ごとにご意見ですとか、ご質問を10分ぐらい取るということにいたします。その後、林委員よりご発表いただきまして、最後に30分ぐらい時間が取れるといいと思っておりますけれども、全体を通した自由闊達な意見交換をしたいと思っておりますので、それぞれの発表の後は、なるべく質問などは、すぐお答えできるようなものにとどめて、大きな議論は後にすることにしたと思います。

それでは、議事に入ります前に、事務局より第1回の懇談会以降の動きについて、少しご説明をいただければと思います。よろしく願いいたします。

【山下計画部長】 それでは、事務局からご説明申し上げます。座って説明させていただきます。

昨年11月8日に第1回の懇談会を開かせていただきました。それ以降の動きについて、簡潔にご説明申し上げます。昨年12月20日でございますが、黒川座長、中村委員、乗竹委員にご参加をいただきまして、現地視察を実施してございます。視察の1つ目は日野市の多摩平の森にあります首都大学東京の国際学生宿舎「りえんと多摩平」を視察いたしました。

ここは留学生と日本人学生が共同生活を通して国際交流を深めることができる宿舎でございまして、地域との交流もあるということで、運営事業者や学生さんから、高齢者を含めた地域との交流の現状などをお聞きいたしました。その後、世田谷区にあります東京都

医学総合研究所に行きまして、ここの西田研究員より認知症ケアの質の向上を図る、日本版BPSDケアプログラムの開発についての説明を聴取し、意見交換を実施したところでございます。

次に、第1回懇談会におきまして、先ほど副座長からもお話がありましたけれども、平成30年夏に政策提言をまとめる一方で、実現可能なものについては迅速に対応するという議論が第1回の懇談会でございました。これを受けまして、都庁の中にございます超高齢社会対策検討本部を開催いたしまして、第1回目の懇談会の議論を踏まえて、積極的に施策を検討していこうと、取組の具体化を図ることとなりました。

そして事業案ということで取りまとめ、懇談会の委員にも説明、意見交換を実施いたしまして、お手元配付、右肩に資料3とございますけれども、これは実は4月から始まる東京都の来年度の予算の、全体でいうと、このような分厚いものなのではございますけれども、この一部の抜粋でございますが、ここで下にありますように、超高齢社会を見据えた取組の全体像とございますが、できるものからということで、新しい取組の予算化を進めたというものでございます。

また、お手元に冊子でお配りしております実行プランの政策の強化版にも、政策案として反映したところでございます。

資料3でございますけれども、一番下にございますとおり、元気高齢者の活躍の場の創出や、視察で意見交換いたしました認知症のケアプログラムの普及促進、あるいは多世代の交流拠点の整備、空き家の利活用といった事業を組み立てまして予算案に盛り込んでおりまして、現在開会中の都議会に審議をさせていただいているという状況でございます。

今後は、本日のご講演の内容、あるいは懇談会における議論等を踏まえまして、夏の提言に向けて検討を進めてまいりたいと考えてございます。

どうぞよろしく願いいたします。説明は以上でございます。

**【鈴木副座長】** ありがとうございます。資料3については細々とお質問があるかもしれませんが、後の議論の所で一緒にやりたいと思いますので、では早速、皆様方のプレゼンをお聞きしたいと思います。

最初に、NPO法人認知症フレンドシップクラブ理事の徳田雄人様、どうぞよろしく願いいたします。

**【徳田氏】** 皆さん、おはようございます。改めまして、認知症フレンドシップクラブの徳田と申します。よろしく願いいたします。今日は、認知症について少しお話をさせ

ていただきたいと思っているのですが、最初に自己紹介をさせていただきます。私は2009年までNHKの番組のディレクターをしまして、医療とか介護とか認知症をテーマに取材をずっと続けておりました。2009年に退職しまして、今のNPOの活動しております。今は自治体とか企業とか大学の方々と一緒に、認知症に関係するプロジェクトを仕事とさせていただいております。それから、認知症の人とか家族のためのオンラインショップのようなものもやっておまして、認知症に関することを色々やっているという仕事になります。

今日は具体的に今何をしているのかという活動についてのご説明は、この後、すぐにさせていただきますと思うのですが、それを考える前に、2009年にNHKを退職してからずっと思っていることについて少しお話をしてから、話をスタートしたいと思っています。

認知症といいますと、通常医療であるとか介護という分野の1テーマとして取り上げられることが多いです。ここに3つ書いてありますけれど、制度の議論が多いのです。例えば、認知症ケアをどうするのか、認知症に関わる施設をどのように整備するのかというようなことが議論されることが多くて、私もNHKにいて番組でつくらせていただいた時は、このようなテーマが多かったです。例えば、認知症に関する医療制度をどう整備していくのか。あるいは認知症ケアでどういったケアが今いいのかというようなことを紹介する番組をたくさんつくってきました。

ただ、NHK在職時に色々な認知症の当事者の方、それからご家族の方とコミュニケーションを取らせていただいて、暮らしの中でどのようなことで困っているのですかとか、どのようなことを思っているのかというお話をすると、どうも制度のことだけではないということが感じられてきました。それを抽象化して考えてみたのが、この図になるのですが、制度のこともとても大事なのですが、実は社会を考える時に、同時に制度のベースにある部分、例えば考え方、文化的な側面とか、あるいはそういった活動がどのように回っていくのかという経済的な側面について、あまり着目されていなくて、認知症の話は常に制度の話を中心としているというような印象を持っていました。

NHKを退職した理由は、制度について取り上げることはしやすいのですが、なかなか高齢社会に対する考え方とか、どのような経済をつくっていくかという話は、当時あまり認知症に関して動きがなかったもので、番組で取り上げることがなかなか難しいということで、力及ばずながらではあるのですが、文化とか経済の側面について、認知

症に関する取り組みができないかということで、2009年に退職をいたしました。

特に左側の文化という所なのですけれども、文化というと大げさですが、高齢者とか認知症の方が増えているということは、皆さんご存じだと思うのですけれども、それが、イコール課題である、イコール問題であるというように考えるフレーム自体も1つの考え方のフレームで、文化だというように思うのですけれども、こういった所から変えていかないと、大きく社会を考えた場合に、大きく変わっていかないのではないかと考えています。

このことを考えるに当たって、具体的なことを少しご紹介したいと思うのですけれども、例えば今、認知症の方が関係する自動車事故というのが増えていて、新聞とかテレビでも紙面をにぎわせていると思うのですけれども、今どのようなことが起きているか簡単にご紹介しますと、高齢者とか認知症の方が運転をしていて事故に遭うということが、事件とか、事故として報道される。そうすると免許の更新の厳格化であるとか、免許の返納を推進しましょうという話になります。この記事にも書いてありますけれども、返納された方が、その後どうなっているのかということを追っていきますと、大半の方が公共交通機関がなかなか利用できなくて、外へ出なくなってしまったという現状があります。外出機会が減り、社会参加が減る。

認知症の方は重度の方ばかりではありませんので、軽度の方も含めて、外出機会が減ってくる。そのことによって身体機能とか生活の質が低下し、医療介護サービス費の増大、社会的なコスト全体は上がっていくというようなことが起きるのではないかといられていまして、現に起きていると思うのですけれども、このような構図がある。

例えば、これを1個1個見ていくと、全部合理的な対策だと思うのですけれども、どうも全体を見ていくと、認知症の方とか、あるいは認知機能が落ちた高齢者の方がだんだん社会から排除されていってしまって、その結果、社会的コストも増大するというようなことが起こっているのではないかと思います。

こうしたことを考えた時に、局所的に合理的な対策というのが集合として考えた場合に、必ずしも合理的な流れになっていないというのが、認知症の課題では特に顕著に見られる傾向かなと思っています。

先ほど言いましたように、これというのは多分一つ一つ合理的に考えても、なかなか変わらない。つまり先ほど言った、文化とか経済の側面に着目しないと、なかなか根本的な対策にはならないのではないかと考えるわけです。

大きな話をさせていただいていますけれど、では、何をしているのかということなので

すけれども、一言で言いますと、認知症の方が地域で暮らしやすくするために、認知症の方と、それ以外の地域の方が隔絶しているような現状を変えていこうということで、文化のほうを変えていこうという活動をNPOで主にさせていただいています。

ここに書いてあるのは、主に今やっている事業なのですけれども、左側にRUN伴というイベントがあるのですけれども、これについて紹介させていただこうと思っています。何をやっているのかといいますと、文化とか大げさに言ったのですが、非常にシンプルなことをやっけていまして、認知症の方と地域の方がたすきリレーをしようというイベントをさせていただいています。2011年から毎年やっているのですけれども、今年で8回目になります。地域の方と商店街の方とか、そういった方が集まってきて、認知症の方とグループを組んで、たすきリレーをするというイベントで、日本縦断、それから昨年から台湾などでも実施していまして、たすきリレーをずっと日本縦断でさせていただいています。去年は1万4,000人の方に参加いただいて、うち1割強の方が認知症の当事者の方ということで、認知症の当事者の方が参加するイベントとしては、多分日本最大だと思いますし、恐らく世界でも類を見ないようなイベントかなと思います。

このイベントなのですけれども、何をしているかといいますと、図式化すると、このような感じかなと思うのですけれども、文化を変えると申し上げたのですけれども、上がビフォーで、下がアフターと考えていただければと思うのですけれども、今現状は認知症は怖いとか、認知症について勉強しないと認知症の方と話してはいけないというような現状があるのかなと。つまり認知症というテーマを口にした瞬間に、非常に皆さん深刻な顔になり、私、よく分からないので、勉強してから出直しますというようなことが、よくいわれます。

多くの方が、親戚の方を除くと認知症の方と接した経験がない。地域にどこかに住んでいらっしゃるかもしれないけれど、会ったことがないとおっしゃいます。こういったことが重なっていくと、認知症の人がいること自体が問題視されていくような社会をつくっている。現状は、こういった形になっていると思います。

たすきのイベントでしていることというのは、認知症について勉強しようということではなくて、たすきリレーというシンプルなイベントではありますけれども、まずたすきリレーをする。出会った方の中に、たまたま認知症の方もいたという体験をするというイベントになります。実際は、先ほど写真が出てきましたけれど、同じようなTシャツを着ているので、どなたが認知症かよく分からないのです。多分この方は認知症かなというような

ことなのですけれども、出会って、知り合っていて、仲良くなって、結果的に認知症の方もいるということが分かるという仕掛けになっています。

ここに書いてありますように、地域に実際に認知症の方も既に住んでいらっしゃるわけなので、そういった方と出会う。それから、その方とお話しをする中で、暮らしの中の困り事を聞いて、自分たちも何かできることはないだろうかということ、それぞれの地域で考えていくことを目指して活動させていただいています。

これについて5分ほどの動画がございますが、これをごらんいただいて、後ほど話を続けさせていただきたいと思います。

(動画上映)

【徳田氏】 今、動画を見ていただいたのですが、このイベントについてご紹介したかったというよりは、このような社会というか、このような文化をつかっていくためにはどうしたらいいだろうかということ、皆さんと共有させていただきたいと思ひ、紹介させていただきました。

このような雰囲気をつくる社会は、どうやったらつくれるだろうか。そのまず第一歩として、そもそも地域に住んでいらっしゃる認知症の方が、どこに住んでいて、どのような顔をしていて、どのようなことを思っているのかということ、地域の方が知るところ、その第一歩ではないかと思ひ、こういったイベントをさせていただいています。

このイベント自体は参加費をいただいて運営して、経費を除いた分の収支から基金化しまして、先ほどの各地の色々な方たちが取組をしている所に助成させていただいて、少ないお金ではあるのですが、一応文化と経済の面を両輪で回せるようにということで、だんだん広がってきております。

先ほどの図に戻りますと、このようなことかなと思ひのですが、認知症の方が増えてきて大変だという話ではなくて、例えば認知症になっても外出してまちへ出て行って楽しい時間を過ごすためには、どのようなまちをつかっていったらいいのだろうかという問いについて、福祉のセクターとか医療のセクターだけではなくて、交通関係とか産業関係とか、そういった所でどういったことができるのかと、一緒に問いを考えていくことができたらすてきなと思ひます。

一応、考えるための材料を調査もしておりますので、ご紹介いたしますと、認知症の方当事者にアンケートを取った結果になります。認知症になることで、外出や交流の機会が減りましたかというように質問しますと、約7割の方が、さまざまな所で減っていると。

例えば電車やバスの利用が減ったとか、買い物に行く機会が減った、外食に行く機会が減った。つまり、それまで消費者として色々なセクターでお金を落としていた方たちが、こういうものを減らしているという現状があります。

その理由についても聞いていますけれども、もちろん症状とかもありますけれども、約半数の方は色々環境面での理由を挙げています。例えば、駅構内で迷ったり、適切なバス停を探すのが難しいとか、券売機や自動改札など機械操作が難しい。お金をおろす時のATM操作が難しいとか、こういったことを理由に挙げていらっしゃいます。もちろん症状自体は医療とかケアの対象かなと思いますけれども、半分ぐらいの方は、こういった理由で外出しにくくなっているということで、こちらの側を変えていくことは十分できるのではないかと考えています。

今日お話しした話は、実は私が勝手に言っているだけではなくて、世界的に認知症フレンドリーコミュニティというものを推進していこうという流れが始まっています、イギリスで主に力を入れてやっているのですけれども、これが今、世界各国に広がっています。ここでいわれているのは、単純に認知症の人に優しくしましょうということではなくて、認知症になっても、ここにあるように意欲とか自信を持って、意義ある活動に参加できている、あるいは地域社会に貢献できていると実感できるような地域をつくっていこうということで、単純に優しく接してあげましょうということではなく、認知症の方がこのような状況まで持っていく社会をつくりましょうということがいわれています。

イギリスでは、例えばイングランド地方ですと75%の地域がこういった認知症フレンドリーコミュニティを目指していこうということで活動をしています。東京都と比較されることも多いロンドンも、実は今の市長さんが認知症フレンドリーな首都を目指していこうということで、2020年に向けてさまざまなアクションプランを打ち立てています。

それぞれ自治体の中では、こういったさまざまなセクターの人たちが入って、認知症の人に住みやすい地域を実現していこうという取組が始まっています。福祉セクターだけではなくて、警察とか犯罪関係の対策部署、それからスーパー、図書館とか、それから学校、病院とか、スポーツ施設とか、観光案内所とか、一見関係なさそうな方たちが、認知症の方が外出して時間を過ごせるようなまちをつくっていこうということで、さまざまな取組をしています。

それからイギリスでは、さまざまな業界団体別にも、どのようなことができるかというのを国を含めて検討しています、こういったガイドラインもできています。例えば、認

知症フレンドリーな金融業界を目指そうということで、認知症フレンドリー金融憲章というものができたり、さまざまな業界ごとのガイドラインができていたりします。

このイギリスで始まった動きは、各国に今、波及していきまして、ヨーロッパを中心に認知症フレンドリーコミュニティをつくっていこうという流れが各国に広がっている状況です。取組のロゴマークを見ると、ヨーロッパだけではなくてインドネシアとか、ナイジェリアとか、こういった国々も活動をしていることが分かります。

今日お話ししたことは、インフォグラフィクスのような形でまとめますと、右側の認知症に対処する社会というものと、認知症フレンドリー社会を比較したものなのですけれども、現状は右側だと思うのです。事故が起こるたびに報道され、何か対策しないとイケないということになり、どうしたらいいかというのを専門家が考え、1つの何か解決策を出す。それが先ほどの免許の悪循環のような話だと思うのです。一つ一つは間違っていないのですが、全体が何かおかしい。

左側のアプローチというのは、認知症の方たちと一緒に生活の困りごとを考えていく中で、新たな暮らしやすい社会のデザインを考えていこうというようなアプローチになるかと思えます。

具体的にどのようなことができそうかということで、私が関わっている東京都町田市の例を少し最後に紹介したいと思いますけれども、町田市でも認知症について取組をずっと続けてきておりまして、どのようなことができるかというのを進めてきています。町田市は、ここの写真にありますとおり、コンビニであるとかカフェチェーンとか、さまざまな企業が入って認知症フレンドリーなまちをつくろうという取組が数年前から始まっています。そういった方たちとワークショップをしながら、どうしたらそういったまちができるかというのを、さまざまな対話をしながら考えてきました。町田では、ここにありますように、16個の目標を立ててまちづくりをしていこうとしています。

その目標を見ますと、例えば、1番は早期診断のような話なのですけれども、7番は、私は素でいられる居場所と仲間を持っており、一緒に時間を楽しんだり、自分が困っていることを話せる。これを実現するために、各セクターで何ができるのかということをお話し合っていて活動をしています。例えばどのようなことなのかといいますと、町田市ではスターバックスで認知症カフェをする事業をしているのですけれども、これはスターバックスの方からのお話があって実現したものなのですけれども、通常、認知症カフェというのは公民館であったり、介護施設の1室でやっていることが多いのですけれども、もっと行きやす

い所でやりたいということでお話があり、ではスターバックスでやりましょうという話になって、こういった場が実現していたりします。

それからホンダのディーラーさんは、認知症の人が働きたい、地域で貢献できるような仕事がしたいという声を聞いて、洗車の作業を仕事として依頼するというような活動もしています。

ということで、今日少し時間を超過してしまいましたが、お伝えしたかったのは、認知症の人が増えてきて課題だというのは別にいいのですけれど、それによって何かが生まれるわけではないので、認知症とか高齢化の課題を入りに、新たな社会のデザインを考えてイノベーションを起こしていくことがとても大事なのかなと思います。そうすることによって認知症のことを解決するだけではなくて、認知症の方の課題を通じて全員が暮らしやすい社会の設計を考えていけるのかなと思っています。

済みません、時間を超過してしまいましたが、私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

**【鈴木副座長】** ありがとうございました。時間が少なくなってまいりましたので、もし、ご質問などがありましたら、ご質問いただければと思います。大きな議論は、後でまとめてやりたいと思います。いかがですか。よろしいですか。

今、堀田委員がいらっしゃいましたので、慶応大学の堀田聡子委員でございます。一言だけ、ご挨拶いただいていいですか。

**【堀田委員】** なかなか日程が合わなかった上に、遅刻をいたしまして申しわけありません。よろしく願いいたします。

**【鈴木副座長】** 介護の専門家でいらっしゃいまして、オランダなどのご事情にも詳しいので、是非そのようなものもご紹介いただければと思います。

それでは、恐縮でございますけれども、議論は後ほどまとめてということにさせていただきます。早速次のUDS株式会社の中川敬文様、どうぞよろしくお願いいたします。

**【中川氏】** 皆様おはようございます。UDSの中川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私ども、まちづくりにつながるような建物の企画をして、設計をして運営をする会社なのですが、もともと都市デザインシステムという社名でやっております、デザインと仕組みでまちを盛り上げていこうという会社でございます。

私自身は東京生まれ、東京育ちでございまして、地域の仕事をしています、東京愛が最近かなり芽生えてきました。20代は新潟県の上越市という当時13万都市に移住をして、子

供は上越生まれ、ローカル色豊かな環境の中で大規模なショッピングセンターをつくりました。30 前後で東京に戻り、今の会社に入り、創業者と共同代表で 20 年ほど経営をやらせていただいています。今現在ごらんのとおり住宅からホテル、商業施設、オフィス、まさに必要なものをつくるというスタンスなので、特に何屋という自負はしていません。会社は今、沖縄、中国含めて 600 名ほどのスタッフで、建築をやっている人、ホテルをやっている人、シェフをやっている人、不動産をやっている人、自分の強みに合わせて自由に仕事をしています。私も経営に加えて、自分がやりたいことをプレーヤーとしてやっておりまして、地域とキャリアをテーマに仕事をしてきております。

まちづくりとホテルと海外というのは、今の会社としては大きな戦略になるのですが、我々は場をつくる会社なので、人と場をつないで、いいコミュニティをつくっていくことを共通項にしています。

ホテルは、まちにとって一番デスティネーションになり、まちの貢献にもつながるのではないかということで、こだわってやってきております。まちにどう開いて価値を高めるかということをテーマにやっておりますので、私どものホテルには、統一のブランドがなく、その地域、その地域で一つ一つオリジナルをつくって名前をつけ、地域のニーズにあったいいホテルをつくりたいなと思ってやっています。

それから海外については、私どもの創業者の梶原が 7 年ほど家族で上海に移住して陣頭指揮をとっております。私もその前、1 年北京に常駐をしていました。今、中国で 60 名ほどの規模になっているのですが、会社としては今 10 カ国ぐらいの社員がおりまして、この 4 月もベトナムと中国の方に新卒で入っていただいたり、エストニアの社員の方もいて、色々教えてもらっているのですが、海外の接点は、まず海外の方を社員に入れるのが一番いいかなと思っています。

まちづくりでいきますと、新潟、鹿児島、沖縄、色々と各地でお手伝いはさせていただいております。これまでは、各地域に行き行って拠点を盛り上げようという仕事をしたのですが、全国に共通する産業は小売業と飲食業ではないかと思ひまして、それを東京で実現するというのがアンテナショップだと考え、滋賀県のアンテナショップを今、日本橋で、企画、設計から運営まで一切やらせていただいています。あと京都では地方卸売市場、これもまちにとってはかなり重たいテーマなのですが、非常に衰退してきている中で、ここにどうやって一般の市民の方が入るようなにぎわいエリアをつくるかということで、宇治市で今、鋭意やっているところがございます。

ホテルにつきましては、もともと予備校の校舎をリノベーションして京都にホテルカンラというものをつくったことを皮切りに、今は8カ所、自分たちで企画して設計したものを運営までやらせていただいているのですが、今後は沖縄中心に2020年までに10カ所ほどホテルをつくりまして、会社としても一番重要な事業としてやらせていただいています。

それから海外につきましては、無印良品さんと提携をしまして、北京でMUJI HOTELというブランドをつくって、我々が企画、設計して、運営をやらせていただいて、逆輸入のような形なのですが、2019年には銀座にMUJI HOTEL国内1号店をつくらうということで、やらせていただいております。

直近では3月16日から入寮するのですが、小田急線の湘南台の駅前で学生レジデンスを初めてやらせていただきます。もともと学生寮の食堂を全国4拠点で管理栄養士、調理師を配置しまして、学生さんにいい食事をとということでやっていたのですが、食堂だけだと効率が悪いので、寮全体もやろうということで、150人ほどの学生さん、湘南台ですので慶應のSFCとか日大も近いので、やっぴいこうということで、3月16日より始めます。

それからあと、私自身が今、担当しているのが、神保町に岩波ブックセンターという、岩波書店の本を取り扱っている書店さんが、去年残念ながら閉店になりまして、そこを引き受けて、立地的にはコンビニ、ドラッグになりがちなの所なのですが、本のまちのシンボルになる場をつくりたく、神保町ブックセンターという施設名称で4/11に開業を予定しています。本だけでは売れないので、カフェとかコワーキングとか、我々がやっているものを総動員しまして何とか盛り上げていこうということで、やらせていただいています。自分自身、文京区出身で、神保町も非常に通っていた所でもあるので、コンテンツとしては本のまちというのは、これからインバウンド時代にとってもすごくいいのではないかと考えておりますので、盛り上げていきたいと考えております。

あと、地域の仕事の代表例でいきますと、今、薩摩川内市はスマートハウスというインターネットを使った省エネ住宅になるのですけれど、その企画設計をして、ここ3年ほど社員が常駐して運営をしています。また、薩摩川内市の中心市街地、全国的にほかの例をいうまでもなく、シャッター街が増えております。薩摩川内市主催で、「薩摩國シティセールス大学」という市民講座が開講され、私は、その中の「中心市街地活性化学科」の講師として3年間毎月1回講座をもっています。今18%ぐらいのシャッター比率なのですけれど、これを少なくとも15%に減らしてくれということで、4店舗ほどの再生を目指して先々週も20人ぐらいの受講生の方と120店あるシャッター街をくまなくまち歩きしながら

見ていったところですよ。

今日のお話に即して、私なりにいつもやっていることを整理をしたものなのですが、地域のお仕事をさせていただく中で、実感値としても、どこに行っても人口減少という課題は非常にダイレクトに感じます。先々週は長野県の泰阜村という、人口1,700人の、国道も信号もコンビニもない所に行きました。根本的に厳しいので、村を挙げてやらなければいけないということであったのですが、川内市10万人、上越市だと20万人とか、その辺の規模は実感値がなかなか湧きにくいのですが、ひしひしと来ている。

人口減少というと抽象的なのですが、端的にいうと、皆さん口々におっしゃるのが、若者がいないと。それから高齢者だけが残る。そして観光客もなかなか来ないということで、何とかしてよという話もあるので、当然できることはそれほどなくて、視点としては私たちにできることでいくと、魅力的な教育の選択肢であったり、魅力的な仕事であったり、あるいは高齢者の方には特に魅力的な役割をどう提供できるか。それから解決策については、まちの魅力をというものがまず根本にはあるのですが、これだけのインバウンド時代になってきた時に、東京はもうあふれていますので、どうやって地方に送客できるか。肝心なのは、リピートをどうつくれるかというおもてなし力を我々なりにテーマとしてやっております。

教育によるまちづくりということを幾つか、この後、事例を紹介するのですが、教育という所と、あとはインバウンドという切り口で、最近は仕事をしています。

右の所は最後に改めてお話をしたいのですが、自分なりに高齢者と子供、外国人を、どうまじり合わせるかというのが1つ大きなテーマではないかと思っています。

キーワードがたくさん出るので、浅めな話で大変恐縮なのですが、色々考えていることを羅列させていただきたいと思います。

子供絡みでいくと、キッズニアというのが一番代表的な実績にはなるのですが、10年ほど前に、子供の職業体験というのは必要ではないかということで、私も共感をして、会社として責任をもって仕事をするために投資をして筆頭株主の立場でつくりました。私も常駐してパビリオンの子供にどのような体験をさせるかという企画でしたり、スポンサーを見つけてきたり、設計をしたりということで、今でも結構エデュテインメントという概念は、私の中ではベースになっています。

一方で、東京都民なので東京でいいことをしたいということで、私は練馬区に住んでいるものですから、練馬区に氷川台という有楽町線の駅があるのですが、そこから7分の所

に練馬区こどもの森という自然公園の運営に携わっています。デンマークのプレーパークにヒントは得ているのですけれども、基本的には禁止のない公園ということで、自分の責任で自由に遊ぶ。原則自分の責任で遊んでくださいというコンセプト、プレーリーダーが常駐者として二人ほどで子どもたちを見守りながら、このような遊具もみんなで作って、ウオータースライダーでみんなで泥だらけになって遊んだり、それからくぎ刺しという遊び、結構昔の方はよくやっけていて、こどもの森でもベーゴマとかくぎ刺しとかやっけていくと、近所にいるおじいさんがやたらにうまかったり、急に神として子供たちからあがめられたり、ふだんですと子供と接点がない高齢者も、くぎ刺しでいくとスターになれるというようなところもありまして、そのようなツールとしてはいいかなと思っております。

それから練馬大根ではオーソリティといわれているのですが、テレビにも出ている渡戸さんはボランティアとして野菜づくりを教えてくれるということで、いつもお世話になっております。この農園も本格的なものを持ちまして、このような感じで畑を本格的に持っております。大根を収穫したり、近所にお裾分けをして、ご近所付き合いを学ぼうとか、これは冬に植えた大根が、ようやく取れるよということで、大きなものになると1メートルぐらいになるのですけれども、このようなものもスーパーで見ているとなかなか分からないところもありますので、このようなことを、氷川台ですから、都会の真ん中で近隣との関係は非常に大変な所もあるのですが、やり始めて2年たちますが、とてもいいのではないかと考えてやらせていただいています。

自然と遊ぶ、自然で体験するというを第一に置きながら、それだけだと、これからの時代は生きていけないのではないかなという部分もあるので、神奈川県海老名市ではRICOHさんと一緒に、ビル丸ごとフューチャーセンターというコンセプトで建物をつくっているのですが、3階でコサイエという、子供がサイエンスする家という名前をつけて、学童保育と科学教室を一体で我々は運営しております。プログラミングとか、AI、ロボットというテーマを中心にやらせていただいています。我々のスタッフが子供たちに教えている所が日経の1面に取り上げられたところなのですが、かなり親御さんたちもプログラミングやAIというのは当然関心は高い。

でも一方で、それだけだとバランスが悪いかと個人的には思っているのですが、ジモティーチャーという、地元の高齢者の方、色々なスキル、才能、能力をお持ちなので、その方々に定期的に来ていただいて、子供たちに色々な秘伝をしていただいています。蜂蜜農家さんに蜂蜜のつくり方を子供たちに教えていただいたり、こういった科学的なこと、自然的

なことを含めて、まちの人と一緒に学べるといいのではないかとということで、やらせていただいています。

あとは、これを補完するような形でレゴとも提携をして、レゴスクールという、プログラミングや、ロボットでレゴを動かすということで、子供に興味を持ってもらうということでやっています。

今、私が一番時間をかけてやっているのが、長野県の佐久穂町という町がありまして、1万1,000人の町で、廃校が4校ほどある所だったのですが、その1つの廃校を活用して、オランダのイエナプランという教育メソッドを活用した小学校を、個人的には6年越しだったのですが、ある方が財団をつくっていただいて寄附をしていただいた。それを財源に今イエナプランスクールを、来年の4月開校を目指して、私たちは校舎の改修の企画、設計という立ち位置でやらせていただいています。このような廃校というのも、色々な市町村どこでもあるような内容なのですが、なかなか活用というのは難しい部分もあったのですが、今回私立で一応学校はつくる予定なのですが、当然私立ながら地域の人と一緒につくっていききたいという思いもありまして、学校名を地域の方と一緒に、大日向小学校という正式名称と、サブネームで、しなのイエナプランスクールと。先週はちょうど冬の学校ということで、地域の方々にみそづくりのワークショップをして、入学予定の子供たちと入学前から交流を重ねています。

オランダは私はかなり好きで、五、六回行かせていただいています、イエナプランのメソッドに関しても、基本的にはマルチエイジで、多年齢で学ぶということと、それから毎日サークル対話で、先生もこの輪の中の一人としてはフラットに話したり、ワールドオリエンテーションというのは科目を排除して、私がたまたま行った時、カタツムリを見て1時間話すという、そのような面白い授業で、先生は問いをかけるだけで、おなか減っているのかなとか、何でぬるぬるしているのだろうかとか、名前は何だろうかというようなことを勝手に問いをかけて、みんなで考える。

それからブロックアワーというのは、自分で時間割をつくって、それを自分で習っていくというやり方になるのですが、こういったメソッドがとてもいいなと思っていて、今回色々と提供して、やらせていただいているところです。

あともう1つは、湘南台でつくらせていただいた学生寮なのですが、次の展開としてもう少し意味合いを深めたいと思っていて、HLABの小林亮介さんと提携をして、彼らが提唱している教育寮、これからの教育は住環境であるべきという、ハーバードでもミッシ

ョンに乗っているのですが、その要素を取り入れて、寮にいながらにして学び合える、あるいは社会人や高校生、高齢者とも語り合えるような場をつくってみたいということで、レジデンシャル・カレッジという名前で、2020年目標で、今、小田急沿線でつくろうということを進めております。

あと、インバウンドのことについても少し触れさせていただきたいのは、これだけインバウンド時代になりながら、私は高校で授業を定期的にやらせていただいているのですけれど、高校生でインバウンドを知っている人に手を挙げてもらったら、2人しかなくて、愕然としました。これからの産業においてインバウンドというのは自動車や半導体が落ちてくる中でいくと、すごく重要な産業で、どうもインバウンドというと中国人の爆買いを想定するレベルで終わらせている人がいるのですけれど、もっと真剣に考えたほうがいいと個人的には思っています。昨年10月に開業したインバウンドリーグというコワーキングスペースは、名前の通りのコンセプトなのですけれど、インバウンドのベンチャーとか事業者を集めたコワーキングをつくって、訪日外国人、在日外国人を集めながら、新しい事業をつくろうということをやらせていただいています。

時節柄、ワールドビジネスサテライトでも5分ほど特集していただいたり、需要の高まりを実感しています。ここをもっと盛り上げて、地域により多くの外国人が何回も訪れたくなるような、そのようなまちづくりをしていきたいと思っております。

インバウンドリーグがきっかけで、やまごころというインバウンドマーケティングをやっている会社と合併でエリスタという旅行会社をつくりました。今全国各地、我々がやっている滋賀とか京都、沖縄に外国人をいざなっていこうということで、手始めに下北沢、この間、外国の方を連れてスタディツアーをして、3月末にインバウンド向けのツアー造成を終えまして、発売をする予定と、あと、川崎のオンザマークスでホテルをやっているのですが、そこにもっと外国人をとということで、川崎市から委託を受けて、川崎全体にインバウンドが来るためにどうしたらいいかということで、外国人の方をお招きしてワークショップをやらせていただいたりしております。

早口で恐縮だったのですが、そのような形で我々がやれることというのはたかが知れてはいるのですけれども、個人的には、ちまたでよくいわれることではあるのですが、ダイバーシティというのは結構大事ななと思っていまして、高齢者のことを高齢者だけで考えていても、自分は今51なので、準高齢者だとは思っているのですけれども、自分と同じ年代だけだと嫌だなというのはすごく思います。

今まで日本で暮らしてきたので、日本のことはもう知っているのですが、新しいことを知りたいという地域好奇心を満たすには、一番分かりやすいのは海外の見知らぬ方と 70 になってお友達になれるとか、そのようなまちがつかれるといいのではないかとということと、子供たちにとっては若いころから外国の方と普通にお話しができたり、高齢者の方とお話しできたりするといいいのではないかと考えています。

ドイツに 2 週間前ぐらいに行った時に、ドイツに在住している日本人の方が、ドイツで子供を産むことを決めたと。選択肢は日本でもフランスでも良かったのだけれど、何でドイツにしたのですかと言ったら、ドイツは特別支援学級はないと。障害のある方も、1 年生から一緒に暮らせると。そのような多様化された環境が良くて、日本の学校は気持ちが悪いというような話は、同質化されていたので、すごくいじめも起きやすいし、オランダのイェナプランでも、実はオランダの国籍の子というのは 5 割ぐらいしかなくて、ほとんどが多国籍の子供という用語があるかもしれないのですが、そのような中でいくといじめはほとんどないということで、子供にとっては多様化した環境、あるいは自分と違う国の人、あるいは全然自分と違う年代の人と暮らすことが、自分にとっては一番いいのではないかと考えております。Ediperience というのは私の勝手な造語で、Edit とか experience をがっちゃんこした言葉なのですけれど、体験をどう編集するかというのが一番大事で、高齢者からすると、自分が体験したこと、ただそれを朗読のように若い人に伝えても、聞くほうが眠くなってしまうので、時代に合わせて自分が体験したことをどのように編集するかというのは大事だと思いますし、あるいは外国人の方も、最近外国人の方とワークショップをすると、日本に来て、ライク・ア・ジャパニーズというキーワードがよく出ます。日本人と同じ体験をしたいと。これは自分が海外に行った時も同じだと思うのですが、そのような意味では、外国人向けに日本でできる体験をどう編集するか。もう忍者ではないかなと個人的には思っておりまして、そこをどう体験企画ができるかというのが、仕事としても大事なかなと考えています。

子供はキッズニアで私が一番力を入れてきていることなのですが、子供は一にも二にも体験だと思いますが、それもある程度は、このような体験をしてほしいという編集の軸がないと偏ってしまうかなと考えていますので、このような形で Ediperience という言葉を最後に言わせていただければと思います。

時間をオーバーしてしまって、すみません。

**【鈴木副座長】** ありがとうございます。大変示唆的なお話だったと思います。

ここで質問等々、コメントなどありましたら、いかがでございますか。黒川先生、いかがですか。

【黒川座長】 私は最後にまとめさせていただきます。

【鈴木副座長】 では、最後までご発表いただいてから、議論にしましょうか。それでは株式会社グランドレベルの田中元子様、よろしく願いいたします。

【田中氏】 よろしく願いします。田中と申します。私が、今日機会をいただいてお話しさせていただきたいことは、超絶シンプルなことで、私の取組もとても小さなことなのですが、それについてお話しさせてください。1階づくりはまちづくり、1階革命なくして都市再生なしと考えています。

グランドレベルという会社をやっておりまして、2016年にできたばかりの会社です。私たちのやっていることは、1階づくりはまちづくりという言葉を広く知ってもらいたい、このように実践されるまちが生まれてほしいという願いを込めてつくった会社です。このようなことは当たり前ではないかという人もいます。でも、どうですか。オフィス、住宅、ニュータウン、マンション・団地、公共施設、美術館・博物館、商業施設、色々あります。建物の1階だけではなくて、公園や駅前広場、遊休地、空き家、空き地、駐車場、そういった部分も含めまして、まちに立った時に、アイレベルといわれます、75度といわれています、この視界に入る部分が私たちにとって、まちと呼んでいる部分なのではないかと思えます。ここは四十何階だよ、地下に住んでいるよ、そう言われても、それはともかく、誰かとまちのことを話す、それは1階のこと、グランドレベルのことを話すことなのではないかと思うのです。

既に5人に1人は65歳以上、2035年4人に1人は65歳以上というように資料で拝見しました。本当ですかと思いました。だって、まちの中に若くて健康な人しかいないじゃないと思います。それはそのはずです。若くて健康な人基準でまちをつくってきたからです。

もしくは人気がない、そのどちらかしか見られないような感じがしたのです。でも、一方、どうでしょう。海外に行って何気ない風景を写真に撮ります。必ず人が写っています。人がいるための工夫がたくさんしてあります。ベンチが置いてあったり、パラソルがあったり、1階の路面が全部店舗になっていたりします。店がいいと言っているわけではないのですけれど、1階によくシールをべちゃっと張って事務所にしたり、密室をつくる方がいますけれど、今すぐ1階から出ていくべきだと思っています。見られたくない人は、上に住めと思っています。1階でやるべきことは、見られること。そして大事なことが1階

で起きるべきです。

これはポートランドの例です。こちらはロンドンです。どの写真も祭り事ではない日常の風景ですが、とても魅力的です。日本人も、こういったものは描いてきたわけですが、地面を描いていると同時に人を描いています。まさに人がいなくては意味がないのです。ゴッホだって、人がいたから描いたのだと思います。グランドレベル、私たちがまちの中で見る風景というのは、人がいるから、人がいることで生き生きとした生気を宿すものだと考えています。

人口が1,000人いるまち。でも、みんなマンションに閉じこもっています。そのようなまちより、人口が100人しかいないけれど、みんなまちに出てきています。どちらに住みたいですか。どちらのまちが豊かだと感じますか。

グランドレベル、さまざまな問題が関わっていると思います。一人でも声をかけられる人がいたら、孤独の問題が少し解消されるかも。そこで色々な大人たちと知り合えたら、教育の問題にも関わるかも。経済性、少子高齢化、情報化、色々な問題があります。防犯、防災もあります。さまざまな問題が関わっているのが1階です。グランドレベルです。

つまり、その地域が幸せかどうか、幸せな社会だと感じられるまちかどうか。それがグランドレベルのつくりにかかっているのです。グランドレベルで何が起きているか。どうつくられているか。それにかかっていると、私は思っています。

なのに、周りを見渡すと、まずいではないか。水辺の話もよく出てきますけれど、セクシーではない水辺はどうですか。ここでデートしたいですか。公園、私、この写真は二度と撮らないと思います。何でこのようにつくるのかな。歩道。まず人がいません。公開空地。これは本当にどうにかしてほしい。全く公開していない公開空地ばかりです。駅前広場、商店街、コインパーキング、人がいないではないですか。この写真たち、人はどこに行ったのでしょうか。人口が全くいないまちを撮ったわけではありません。みんな建物の中にいるのです。グランドレベルに人がいないことが問題なのです。人口が多いまちより、人の姿が見えるまちがいいでしょう。そのように思っています。人がいるまちと、いないまち、10年、20年、30年と進みますと、どんどんその差が開いていくことは、火を見るより明らかだと思います。

ここでオーフスというまちを1つ紹介したいと思います。日本だと、都内でいえば豊島区、目黒区、墨田区、港区、このあたりが同じ規模の人口を持っている所です。でも、密度としては91 k m<sup>2</sup>、26万人と書いてあるので、全く違った人口密度ではあるのです。なの

に、オーフスのほうが全く人口密度が薄いにもかかわらず、見てください、これは別に祭りをやっている風景ではないのです。川を見てみんなが和むように設計されているグラウンドレベルなのです。どこにでも人がまちの中で暮らす、たたずむ、そういったことが自然に行われているまちなのです。まちの中でスポーツをやったりするような工夫もされているようです。

私、こういったまちがいいなと思ひまして、いてもたってもいられなくて喫茶店をつくってしまいました。お店ひとつない真っ暗なまち、住宅街なのに真っ暗なのです。なぜならマンションが乱立しているからです。マンションが乱立しているまちは、なぜ真っ暗なのか。マンションがみんなエントランスホールにするからです。エントランスホール、エントランスホール、エントランスホール、駐車場、エントランスホール。明かりが1個もないのです。まちに人がたたずめない。そういった所に市民の能動性をかなえる場所をつくりたかった。

こういったビルでした。それを、こうしました。小さな喫茶店です。中を見てみましょう。このような感じで、喫茶ランドリーという名前のおり、洗濯機があるのです。洗濯機があるだけではなくて、ミシンやアイロンもあります。洗濯機のある場所を、まちのみんなですべて使うまちの家事室と位置づけました。なぜなら、マンションに住んでいる人がろくすっぽいい環境で家事をしていないと思ったからです。たまにはまちの人と、友達と、楽しくみんなで洗濯したり、ミシンをかけたり、そうしたらもっと孤独ではなくなる。楽しくなるではないか、そう思いました。

市民、お客さんのあらゆるやりたいことを実現する、それを応援しただけです。オープンして、まだ2カ月しかたっていないです。私から何かいいことやってください、どんどん使ってください、全然プロモーションしていません。それなのに、まちの人が自由におくとどんどん盛り上がってきました。DJが来て、おじいちゃん、おばあちゃんがいる、DJはおじいちゃん、おばあちゃんがお客さんに来たら日本歌謡曲に選曲を変えていたりします。気が利いていますね。

あのテーブル借りられますかと言われた時に、貸しますけれど、何をしますかと言ったら、パンをこねはじめた。このようなママさんたちがいます。パンが焼けたから、味見しませんか。在勤者、サラリーマンがお茶を飲んでいたら、パンを焼いたママさんが、味見どうぞとパンを差し出したりして、そのような風景も見られています。

ミシン、アイロンもよく使われています。男性も結構使うのです。意外と家事というも

のには男女関係ないのだなと思いました。色々な人がミシンをいじって、作品というか、自分のこしらえたいものや、繕いたいものを繕ったりして過ごしています。

これは私の事務所スペースです。もう、すっかりまちの子供たちに占領されていまして、肩身小さくご飯を食べたり、仕事をしたりしています。まちの企業に勉強会の会場として使われたりもしています。私が企画したのは、最初の内覧会に合わせたトークイベントだけです。ほかのイベントは全部まちの人、お客さん、そういった人がここに持ち込んで、ここであれをやらせて、これをやらせてと提案してくれたのです。

私は何をしたかったか。「禁止」ではなく「自由」にした。小さなやる気を最大限に引き出した。まちのやる気のうつわをデザインしたと3つ書いたのですが、3番のやる気のうつわというのも超大事なのです。お弁当箱に例えると、色々詰め込んだお弁当、全部気が利いたお弁当、はい、どうぞと言われたら、それを受け取って消費するだけです。でも、足りない、隙間がある、そういった時に、ここに私だったら何を入れよう、こうしてみようかな。人が自分から能動性を持って工夫しようという、そのような隙間があるデザインにわざとしたのです。そうやって人が自由に使ってくれるステージをつくりました。

しかも、それはまちの中にできたことが大事なのです。まちの中で市民のやる気が引き出されたという話なのですが、時間があまりないのだけれど、最後にもう1点、まちの中に今のように喫茶店をつくるとかではなくて、もっと簡単な方法を提案したいと思います。まちの中に最も素早く、最も簡単に、お年寄りから子供、そして私たち、あまねく人々の居場所をつくれる天才的な装置があります。ベンチです。ベンチは天才です。ベンチがいかに天才かという話をしたいと思います。

私はTOKYO BENCH PROJECT というものを勝手に立ち上げています。ベンチは座るためだけのものなのか。よく、そう思われます。高齢者のため、弱者のため。ばかにしないでほしい。ベンチをうまく使う人は知っているのです。ベンチの機能が1つだけではないことを。これは100年も前にアメリカのセントピーターズバーグというまちで、このような風景がありました。異常です。あるお店がベンチを置いて、それを市長さんが気に入って条例化したといわれています。このころ、都市戦略としてベンチの設置7,000も置かれました。全米からこの風景を見に、人が集まったそうです。

最近ではこのような話もあります。デンマークのコペンハーゲン空港に置かれたベンチ、このベンチの足元にステッカーが張ってあります。このベンチは1887年にできて、コペンハーゲンに2,500も置いてあるのです。あなた、これからコペンハーゲンのまちでどのよ

うな経験をするでしょうか。ベンチを見つけたら、このハッシュタグとともに写真を撮ってください。そうしたら、ベンチのある何気ない風景をみんな写真に撮ってSNSにアップし出した。これがそのまま広告効果、観光宣伝効果になったわけですが、私が言いたいのは、特別なイベント、何千人動員した、そのようなことではなくて、ごくごくありふれた日常の視点を変えて、あるいは、その質を高めるための工夫をして、日常を豊かにしませんかという話です。

ニューヨークの例も紹介します。2011年、このような話をニューヨーク市長はしています。ベンチは休むだけではない、地域住民が座り、家族や地域社会のことについて、隣人たちと楽しく話すことを可能にするだけではなく、この裏テーマとしては、アメリカはとも医療費が高いので、医療費が高いからベンチを置くのです。ここ、面白いですね。しかもオリジナルのベンチを開発しました。2011年からアメリカ、ニューヨーク市は、このオリジナルのベンチを2019年までに2,000増やすとっています。都市戦略として、高齢化が進む、医療費が高い、そうした時にベンチを置く。もう皆さん、お分かりですね。ベンチがあることで、より行動範囲が広がるからです。1回も休めないまちに飛び出していくのと、何か所も中継場所があって、そのまちに歩き出すのと、どちらが皆さんは気楽ですか。

しかもニューヨークでは、このようなマップをインターネットに置いています。市民がリクエストして、プロットできるのです。私、ここにベンチが欲しいです、ここで人を待つ機会が多いです。メッセージとともにリクエストして、ニューヨーク市はそのリクエストを整理して順次ベンチを置いているそうです。

このようなテープカットが行われたりする。いいですね。このようなベンチ最新事情の一方で、日本のベンチはどうなっていますか。これをベンチと呼ぶのですか。もう墓石ではないですか。これをベンチありますよと言ってしまふことから何とかしたいです。しかも私、最近発見しているのです。ベンチがあまりにないまちには、あの人、浮浪者ではないですよ、ホームレスではないですよ。ベンチ難民が出没しているのです。かわいそうです。ガードレールにもたれる人、植え込みにもたれる人。

最近、東京駅の前でサラリーマンがお弁当を持って困っていました。彼をしばらく観察したのです。どうしたと思いますか。立ち食いしました。立ち食いして、その弁当のからを、ごみ箱も少ないです、そのから箱をがっとうに詰め込んだと、そういった悲しい風景も私は見てきています。ベンチ難民、高齢者に本当に多いです。これは深刻な問題だと思います。

います。

社会実験で、私はベンチを置くというプロジェクトに参加させていただいたことがあります。対象地域を調査しました。神田の一角です。ベンチは1個もありませんでした。そこで私は Kanda Bench Project というものを立ち上げて、ベンチ会社とともに、このようにベンチを並べて観察しました。本当にベンチを置くのはばかばかしいぐらい大変です。盗まれたらどうするのだとか言われます。ベンチの盗難、聞いてみたいです。よく、怪しい人が寝転がったらどうするのだと言われます。いいではないですか。ベンチ1個あって、それが取り合いになるから寝転がっていることが許せないのです。ベンチが1,000あったら、1個ぐらい寝ていたっていいでしょう。自分だって寝たくなるかもしれないのだから。

このように、当たり前ですが、ベンチを置いたら使われています。私はこの経験をもう少し積んで、フィードバックしていきたいと思っています。そして僭越ながら、このような提案をしたいと思います。TOKYO GREEN BENCH PROJECT。今日、百合子先生がいらっしやると思って、このような資料をつくってきてしまいました。百合子グリーンのベンチ、つくったらどうですかと思っています。

私、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の生活文化局のコンペにも、このプロジェクトを引っさげて応募しております。ベンチがたくさんある風景が東京に見られるといいですね。もし、全てかなわなくても、私はやります。JAPAN BENCH PROJECT、TOKYO BENCH PROJECT、ベンチのある日本、ベンチのある東京を、特に2020年までに、もちろんそれ以降のまちづくりを踏まえて実現させていきたいと考えています。

行政に求めたいこと、1階がエントランスホール、エントランスホールにならない、ちょっとしたルールでいいのです、何かみんなで決めませんか。もう1つ、個人の小さなチャレンジ、それが実現されるまちをつくりませんか。地価が高くてマツキヨとかスターバックスしか入れない、これは田舎のロードサイドと全く同じ風景です。東京らしさとは何ですか。東京らしい個性が1階に見える、そのようなまちが実現したらいいなと思いました。そして高齢者、身体的弱者、あるいは精神的弱者、それは昨日、今日の私たちかもしれません。あらゆる人の存在、活動が許容される、見える、そこにいてもいいよ、そのような優しさといえますか、迎え入れる姿勢が見える仕組みやデザインをグランドレベルに求めたいと思っています。

以上です。ありがとうございました。

【鈴木副座長】 大変すばらしいプレゼンを、どうもありがとうございました。何かご

質問などありましたら、いかがでございますか。よろしいですか。

では、林委員からのご発表をお願いいたします。

【林委員】 皆さんのプレゼンテーションがすごく楽しくて。私は経済産業省と3年ぐらい進めてきている高齢者に関する調査について共有させていただきます。これは2016年に行ったものなのですが、目的は何かというと、高齢化のもたらす変化というのは、別に介護施設の中だけで起こるわけではなくて、社会システム全体に変化を起こすであろうと。そのことに対して、どうやってこれが本当に360度全体に関わってくる問題であるか、そして、それはどのような人たちなのか、高齢者とは誰なのかということが見えないまま、企業や自治体が仕組みをつくっていくと、誰のために、何をつくっているのかが分からなくなるのではないかと。これが問題意識としてあったので、グローバルチームで、まず日本だけの視点ではなくて、世界という視点で、この変化がどこに起こっているのかを捉える。そして日本で起こっている変化自体は、世界の高齢化とどこが共通で、何が違いがあるのかといったことも捉えられたらいいのではないかとということで、その比較のために中国の成都というまちを選び、実行してきました。

こういったチームで、企業を巻き込み、大学も巻き込んでやってきて、実際にリサーチの準備をやり、フィールドに1カ月半ぐらい行き、そしてそれを統合したという形で、このレポート自体をつくっています。日本語と英語でこのレポートの結果自体はオンラインに全て置いてあるので、今回は本当にポイントだけを紹介させてもらおうと思います。

まず1つ私たちが提案したいと思っているのは、これは仮の提案なのですが、ライフステージというものを更新しませんかと。これは実はもう何十年も前に人間発達学のアームストロングさんが提唱して、これに基づいて世界中の社会システムが何歳から保育園に入るのか、何歳から小学校に入るか、何歳から成人と呼ぶか。世界中が大体共通しているのは、人間発達学をベースにしているのですが、実はこれがつくられた時に、寿命が大体60歳ぐらいなので、60歳以降はあまりきちんと定義されていないのですが、高齢者ということになっているのですが、実は50の時点でまだ折り返しにすぎないという時代になった時に、社会システムを設計する時に、ライフステージ自体も更新したほうがいいのではないですかということが問題意識でして、これを採用してくださいではなく、東京からいち早くライフステージを刷新しましたと。これに基づいて色々な社会システムを連携させていったらいいのではないですかということをする必要があるかなと。

少なくとも高齢者といわれる中に、大きく3つのポイントはあると。高齢社会の最初の

役割というのは、実は50代ぐらいで自分の親が、まさに体が動かなくなってくる、家の中から出られなくなってくるということを通じて、新しい時期に、子育てをするという1つの責任が終わり、自由になったと思うと、親の面倒を見るという新しい役割を通じて高齢社会に対峙する。なので、社会をデザインする時に、実はステークホルダーとしてきちんと捉えておかなければいけないのは60歳以上の方ではなくて、実は50代ぐらいの、親にかわってさまざまな判断をする子の層があります。

こういった形で社会システム自体の変更、ライフステージ自体を更新したらいいのではないかというのが1つです。今言った、実は多くの80、90になってくると、判断を子供の方がやっている。それからもう1つは、TRANSFORMATION、移行という表現にしているのですが、これが社会から、もうあなたは役割を終えたので遊んでくださいという形で出される、定年退職という形です。でも、60、65で出されても、この後30年、40年遊んでいてくださいといっても遊べない。これが今、日本の社会で大きな不安を生んでいるのは、お金が続くのか、そもそも私は社会において何の役割もないのですかと。このような方々が図書館に行く、家の中に閉じこもっていく、そうすると生きている意味、生きがいは何なのかというような問いになってくる。

見ていただくと分かるのですが、多くの、多分ここにいらっしゃるスーツを着ている、とても人生で成功しているといわれる方に限って、ぱしんとハードストップ、急に、はい、ありがとうございましたというような形で、社会の役割がなくなってしまうのです。それに対して、例えばお団子屋さん、大工さん、何でもいいのです、まちの商店のおじさん、といった、会社などに属さない個人事業主などの人のほうが、死ぬぎりぎりまで実は社会との接点を持ち続ける。

社会的に見た時に、この60、65の後に何の社会に対しての役割を持たないままの社会システムを持っていくと、そういった人間が毎年何百万人と出てきた時に、その累積は実は社会で大きな機会損失をしているのではないかとということがあり、しかもこれは緊急の課題ではないかと、当たり前なことなのですけれど、図にしてみると、どれだけこの赤い部分が失う社会の仕組みをつくっているかということが見えてくるかと思います。

皆さん、みんなできれば死ぬまで働きたい。でも、その働くの意味は、意味が少し変わってきています。そして最終的にはCOPINGという言葉で記載しているのですが、どうしても避けることができない、徐々に体の衰えであったり、さまざまな形での1つの要素ではなくて、蓄積していく体の衰えというものにどう向き合っていくか、この部分がよくいわ

れる介護スーツであったり、介護施設はどうあるかということなのですが、実は先ほどのライフステージで言いたかったように、高齢社会という時に向き合わなければいけないのは、別にこの部分だけではなくて、もっと手前の、もっと社会で楽しく生きたい、貢献したいという人たちも含めた高齢者という像がありますということをお伝えしたく、このようなことをやっています。

この調査では、そのような人たちがどのような声を持っていて、どのような特徴を持っているのかということ ARCHETYPES という形で提示し、企業あるいは組織の人たちが、誰に向けて何を設計するのかという時に、このような人たちがいますよ、忘れないでくださいというのを ARCHETYPES という言葉で表現しています。これらもざっと飛ばしてしまうのですが、例えば、しづしづ都会に移ってきた高齢者の像。これは何をあらわしているかというと、子供が心配して、お父さん、お母さん、私の近くに引っ越してきてとやる例なのです。先ほど言った COPING、色々な機能が落ちてきて引っ越しをするというのは、自分が持っている社会的接点を全部失って引っ越しをすることになります。つまりハンディキャップを持っているような状態で引っ越しをすると、社会との接点、友達をつくるということ、まちに出ていくこと自体が全部できなくなる。でも、子供はそれが良かれと思ってやってしまう。それは外にも出ていけなくなるし、記憶も失うことになって、先ほど言った認知症ではないですけど、社会的に結局誰かの世話にならないとという形になってしまう。でも、このような事情が実は日本でも中国でも同じようなことが起こっているということに対して、像を出させてもらったり、あるいは女性で 75 歳。これはほぼサポートしなければいけない対象のような年齢でありながら、こういった方が民生委員として地域を結びつける役割をしている。

これは別に高齢者を支えるのは若い人とか子供だけではなくて、高齢者同士が支え合うことができているのですよというような、地域を支えるハブになるような人間もいますよと。そういった像を幾つか。

あと、麻雀デライト、介護施設で麻雀をやって喜んでいる女性で、ここは実は中国にしか見られていなくて、日本のケアセンターは楽しむという要素を排除している。中国の田舎のまちに行くと、朝 8 時から高齢者の人たちがじゃらじゃらと麻雀をやっている。あるいは孫のお見合い相手を探すために公園に行く。まさにグランドレベルで高齢者の人たちが色々な活動が許されているのに、日本はまるで年を取ったら欲を捨てた仙人のような人間になっていることが求められていて、麻雀も許されなければ、再婚も許されなければ、

何もかもがだめ、だめと。欲がない人間になっている。そのようなことは全然なくて、何でもっと楽しんで遊んだりすることが許されないのですかというような ARCHETYPES で、実は描かせてもらっています。

それに対して、どのような変化、OPPORTUNITY AREAS があるのかということも幾つか提示させてもらっていて、これも一つずつを詳しくは書かないのですが、1つはストリートライフ、まさに歩いていくまちのレベルで、もっとセレンディピティが起こり、すてきな出会いが起こっていき、日々の活動が生まれるような対策が、大きくこれから必要になってくるでしょうと。

それから、何歳になっても色々な人と会いたい。レッツ・ミートというのをリアルであったり、テクノロジーを通じて、どうやって実現していけるかというのも非常に大きな変化の OPPORTUNITY AREAS だということです。

あと、もう1つ、どうやって働く、生きがいをつくるということ、死ぬまで提供していくのかという領域。それから COPING の領域で、どんどん視界が狭くなってしまふ。この狭くなってしまふ視界を、どうやって広いまま。物忘れが激しいというだけで、旅行に行きたくなくなるという人を、大丈夫よと、全部家がセンシングしていて、火を消すのを忘れていようと、アイロンをつけっぱなしだろうと、そのような所こそテクノロジーがやってあげることが、どんどん私たちの見えている視界を狭めない、ますます広げてあげるためのテクノロジーのあり方というのは、何ができるのですかというような、そういった領域で9つぐらい提示をしています。本当はこれで終わらせようとしていたのですが、田中さんのプレゼンテーションにインスピレーションを受けて、2つスライドを足させていただきました。

1回目の調査をやって、先ほどの調査で私が一番インスピレーションを受けたのは何かというと、今、国が色々考えているのは、これは互惠のシステム、互いに恵み合い、互いに助け合う。人間は誰かに助けてもらわないと生きていけない状態で生まれ、そして誰かを支えるような中年を生き、そして最後は誰かに支えてもらえないと生きていけない状態に返って人生を終わる。これは変えられない。

どうやって、人の助けがないと生きていけない、ここを減らすか。技術で減らせばいい。何かで減らせばいいといって、ここを減らさないで国が破綻するという視点で設計をしているのですが、私が発見した一番大きいことは、何歳になっても支えることができる、この濃い赤を増やすことが一番重要な社会の今求められていることで、人の助けを必要とす

ることを必要とするなど、技術が解決するのだから、あなたが必要とするなどという仕組みではなくて、この部分は私は支えがないといけないけれど、私だって何かを支えてあげられるという、この部分が増えていけば増えていくほど、80になっても、90になっても、100になっても、実は誰かのことは支えてあげることができる。そこをどうやって地域や仕組みとしてつくっていくかということが、大きな意味で私たちが高齢者ということを考えた時に、助けてあげる人ではなくて、助けられる人という仕組みでシステムをつくるかが重要ななと思いました。

最新の経産省との仕組みの中で、それがもっと明示的にあらわれていて、高齢者の人たちにもう1回働いてくださいという時に、男性は大概再就職ができない。なぜかという、自分の能力が今までやってきたエンジニアとして、あるいは会計士としてという、キャリアというところだけで自分の能力を見てしまう。でも、人間というのは、おはようと声をかけてあげられる。あるいは励ますことができる。文章を書くことができる。何することができる。それ全体が人間の能力で、その能力自体を全部まちは必要としていて、助け合うことができる。このアクティブ・フルムーンで物事を考えて、人間の能力を支え合うようにしないと、三日月の一部の能力だけが人間の能力だと考えていても、生きていくことも、まちづくりも楽しくないということを、私のほうではリサーチの結果として共有させていただきます。

ありがとうございます。

**【鈴木副座長】** どうもありがとうございました。それぞれのプレゼンテーションで本当に感銘を受けまして、本当にブレークスルーばかりの大変すばらしいプレゼンテーションだったと思います。

ここから色々議論をしたいと思うのですけれども、少しだけまとめさせていただきますと、今日のお話、それぞれユニークで違うように見えたのですけれども、結構底流は同じだなということで、共通するテーマが多かったと思います。

東京都の立場に立ちますと、行政でございますので、高齢者だけの居場所づくりとか、認知症だけの対策というような観点になりがちなのですが、今日のお話のおおむね最大公約数的なところは、そうではなくて、まちづくりとか多世代交流とかダイバーシティとか、とにかく色々な人がいるコミュニティの中で一緒に解決すべきだというお話だったと思います。

そして、高齢者は単に福祉を施される、お世話される人ということではなくて、役割が

あると。それぞれのコミュニティの中で役割があつて、特に役立てるということが重要で、だからこそコミュニティの一員でいられる。そのようなお世話されるだけの、そして特殊な場所に隔離されるというのではなくて、一緒にコミュニティの中で貢献できるようなものになるのが重要だと。

そして、そのようなまちづくりをするための、コミュニティづくりをするための舞台装置を色々ご提示いただいたということで、それがカフェであり、高齢者だけというのではなくて、色々なものが多目的に入っているような建物であったり、そして公共空間としての1階の活用、自分のものというよりは、もっと公共のもです。イベントですとか、住民参加とか。ベンチは非常に面白かったですね。このようなものを行動経済学でナッジといいますけれども、肩を押してあげるというようなもので、全然世界が変わるというようなお話で、もちろん図書館とか麻雀も、私は妻が中国人なのでよく分かるのですが、麻雀もそうかもしれないなと思って見ていました。

ですので、そのような縦割りを超えたまちづくりの中で、どのような舞台装置をつくるかというのが1つ大きなテーマとしてご議論いただきたいことと、それから、行政の会議でございますので、そのようなものをアクターはほとんど民間ということだと思っておりますけれども、民間に対して、どのような後押しをするような行政施策というものが有り得るのか、何をしてほしいのか。逆に言うと、何をほしくないのかということかもしれないけれども、そのようなことなども議論ができるといいかなと。

そして東京都と基礎自治体と違いますので、結構色々な話は基礎自治体が必要な役割を持つようなお話だったと思うのですが、ただ、基礎自治体だと小さなまとまりになってしまうので、東京都としては多分もっと全体のコーディネートとか、民間を活用するような何か補助事業とか、もうちょっと東京の役割はこうであるというところまで、そこまで議論が行くかどうか分かりませんが、そのようなものがあると、各局がこれから施策を考える上でインスパイアされるのではないかと思います。

それでは、どなたからでも結構でございますので、ご意見等々いただければと思いますが、いかがでございますか。

**【中村委員】** 皆さん、すばらしいプレゼンテーション、ありがとうございました。意見というよりも、幾つか質問をさせていただきたいと思いますが、まず徳田さんから。大変ありがとうございました。対処療法の悪循環ということでした。私も行政にいましたので、どうしても問題があつて、その解決策ということでやってきましたが、それがむしろ

問題を拡大しているというご指摘だったと思います。本当にそのような点は大事で、徳田さんたちの取組には敬意を表します。今「やってはいけないこと」というお話が鈴木さんからありましたので、行政ということではなく、例えば認知症の方に対して医療、介護は専門職の立場、あるいは専門サービスの立場として徳田さんから見て徳田さんたちの活動に対して、今の医療や介護のあり方で問題があるというようなことがあれば、教えていただきたいというのが、私の質問です。

【徳田氏】 ありがとうございます。医療者ということですか。

【中村委員】 医療者をはじめとした専門職についてです。

【徳田氏】 今は活動していますと、さまざまなセクターの方に課題を一緒に共有しようという活動をしているのですが、実は一番共有しにくいのが医療セクターなのです。なぜかというと、医療の方たちは既に認知症というのは病気の1つというような教育を受けてきていて、それは専門家としての医療者が何か解決策を提示すべきだというようにフレームワークを持っている方が多いので、実は違うのです、そのような課題ではなくて、生活の課題が色々あるのですというように申し上げるのですが、なかなかそこが解きほぐすのが難しく、むしろスターバックスとかホンダの方だったら、30秒ぐらい話せば、そのようなことですかということなのですけれど、医療者の方は何年かかっても分からないというところがありまして、一番コミュニケーションを取りづらいのが医療関係の方なのです。もちろん例外はあるわけですが。

医療セクターの方と課題を共有するためには、少し法的な枠組みで、私たちはわりとゲリラ的にNPOとして活動しているのですけれども、例えば東京都であるとか基礎自治体のレベルで、考えるプラットフォームをつくる際に、医療者とか介護関係の方たちが話す場と、それから、こういった市民活動のような課題を考える場と一緒にあるといいなと思うのですけれど、大体別々にありまして、まちづくり的な話はまちづくり的な話、医療関係は医療関係の話で、固まって話している所が多くて、是非考える場を一緒にしていただきたいというのが、行政にも求めることでもありますし、医療者の方にも求めることかなと。

【中村委員】 ありがとうございます。

【鈴木副座長】 ほかにいかがでございますか。

【乗竹委員】 乗竹です。ありがとうございます。非常に全者面白くて、大変アイオーピングというか、目が開いた思いです。4つテーマとして私が感じたことを申し上げて

質問したいのですけれども、1つは、先ほど鈴木先生がおっしゃったとおり、近代化とともにどんどんセクター化していった学校とか病院とかというものを、もう1回横串にしなければいけないと感じました。医療人類学とか医療社会学のところでイヴァン・イリイチという人がいて、1970年代に『脱病院化社会』というのと『脱学校の社会』という本を書いているのですけれども、近代がつくってきた固定概念を、もう1回外して考えなければいけないという本なのですが、非常にそれに近いものを感じたのが1点です。

もう1つは、このような超高齢社会の議論をする時に、社会的支援をどのように提供しようかという議論になりがちなのだけれども、超高齢者がたくさんいる日本というのはビジネスチャンスがたくさんあって、ビジネスモデルが生まれ得るのだなというのが皆さんの発表全体を通して感じたことでした。

もう1つは、世論調査とか定例調査などで浮かび上がる数字に、行政とかシンクタンクはついなびきがちで、何割の人が困っていますとかアンケートベースで洗い出したりするのですけれども、実は林さんがやられたような定性的な調査を含めた学際的な、社会科学的なアプローチというのも科学的だし、総合的なエビデンスをつくっていく上で重要なステップになるのだと思いました。

最後、予算づけ、ルールづくりのような話なのですが、ここに関しての質問が皆さんにあるのですが、冒頭の説明にもあったとおり、どう予算をつけていこうとか、どうルールをつくっていこうかという話になりがちで、言葉が悪いかもしれないけれども、行政機関の焼け太り的なことになりがちな場合もあります。また、行政の方に近づいてくる民間事業者のようなものは、予算ください、お金ください、補助金くださいというような者が多い中で、今日いらっしゃったような方々は、田中さんがおっしゃったように、別に応募に落ちてもやりますというような、本当のイノベーターは別に国のお金とか行政のお金を頼りにしていなくて、勝手にやっていて、すごくいいことをやっている。だからこそ行政の人も、そのような人たちを知らないのです、そのデバイドがあるので、今日はそのような意味で、つなぐ、橋渡しという意味でもすごく意義があったと思います。

そういったイノベーターの人たちが感じていることは、むしろ予算が欲しいとか、補助金をくださいではなくて、どのようなルールがあって、それが邪魔だと、規制改革とか、規制緩和に課題を感じていらっしゃるのではないかと思うのですけれども、現場で、このような規制があるからうまくいかないとか、このようなルールは取っ払ってほしいというようなものがあれば、是非教えていただきたいと思ったのが皆さんに対する質問です。

た。ありがとうございました。

【堀田委員】 私からのご質問は、2つのうちのいずれかを、皆さんにお答えいただければいいなと思ひまして、うち1つは、今乗竹さんがおっしゃったことと共通しているのです。1つは、やる気のうつわと田中さんがおっしゃってくださいました。徳田さんのお話は伺っていないですが、ご一緒したりしているので大体理解しているだろうという前提で、おそらく4人の方々共通で、どうやったら質の高い出会いが生まれ、そこからともにする体験、それは時に最初は演出された体験かもしれないし、でもパン焼きなどもそうですけれど、あれは勝手に出てきて、焼くのはうちでやるからというような感じだと伺ったのですけれど、別に誰かに提案されたものに参加するのではなくて、自分たちで体験をつくっていつてしまおうというようなものも含めて、質の高い出会いがあって、ともにする体験、それが演出されたもの、企画されたものから、自分たちで作り出していくものへというのがあって、次、いかにアクションが連なっていくか。個人レベルのものから、仲間を呼び込み、さらに組織としてのアクション、それが単発のイベントではなくて、アクションサイクルになっていくかというところに大きな関心を持っていて、その前提からすると2つ質問がありまして、1つ目は、やる気のうつわ、これはどちらかという和多分中川さん、田中さんあたりかなと思うのですけれども、やる気のうつわをデザインしていこうと考えた時に、このようなことさえあれば、よりやりやすくなるのだけれどというものが1つです。多分共通だと思います。乗竹さんの関心と同じだと思います。

もう1つは、アクションサイクルという話なのですけれども、特に中川さんの話をお聞きして、体験の編集というお話もありました。徳田さんのやっぺらっしゃることも、出会いをつくる体験をとるところも随分やっぺらっしゃると思います。でも、そこからアクションに、さらに連続的にアクションが起き続けるということを考えると、NPOだからやれること、草の根から入ってくるからいいことと、もっと都なり、国なりでどんとやってくれたほうが、アクションサイクルになりやすいのだけれどと思うことがあれば、これは林さんも、徳田さんも、2つのうちいずれかと言いながら、何となく指定しているようなのですけれども、いずれかはお話しいただけるとありがたいというのが質問です。

それで、それ以外の所のコメントとして言いますと、先ほどの関心でアクションサイクルにどうつなげるかというところを、都のレベルでも個人のチャレンジから組織のチャレンジ。組織としてのアクションにどうつなげるかというのは、ディメンシア・アクション・アライアンスのご紹介も徳田さんはしてくださったと思いますけれども、日本でも宇治市

とか福岡市がこれにならった取組などを始めようと動いていたり、動きつつあったりするところなのですけれども、とりわけ東京のように産業界がとても元気な所で行きますと、横の地域としてのアライアンスというだけではない形で、産業界全体で、例えば経産省は健康経営とかやっていますけれども、ディメンシア・フレンドリー銘柄のようなものを、東京都独自に開発してみようというようなこともあり得るのではないかということがコメントの1つ目です。

それから、あと2つコメントがありまして、2つ目は、おそらく徳田さんが最後に、それから林さんが最後におっしゃってくださったことと関連するのですが、人生の本当に最終章まで自分の居場所、役割、そしてできれば社会に役に立って、それで報酬を得るといいう、働くということを考えた時に、元気な高齢者の生きがい就労ということは随分いわれていますけれども、認知症になっても、介護が必要になっても、必要なサービス、支えを受けながら、しかし活躍をするということについては、まだやりにくい状況のほうが多いと申されていました。

今年度もモデル事業を徳田さんたちも一緒にやっているところなのですけれども、そのように考えた時に、例えば障害あるいは高齢の介護や福祉の事業所のサービスを使っている方々で、社会の役に立ちたいとか仕事をしたいと思っている方々と、人手不足ですとか、これから新しいナレッジを使って、新しい商品やサービスをつくっていききたいというような一般の事業者さんをマッチングするというようなことを、都として乗り出していただくと非常に大きいと思っています。これがコメントの2つ目です。

ですから、元気高齢者の生きがい就労ではなくて、障害のある方はサービス上も色々なものがありますけれども、特に要介護になって介護保険のサービスを使うようになった方々の働くということを、仕組みとしてしっかりと後押しをするような、介護保険の事業所と一般事業所のマッチングというようなことは、是非考えていただけないかと思います。

3つ目のコメントで、これは皆さんのお話を伺っていても、結局つながりを生み出すような、住民一人一人が動きたくくなるような地域づくりということを考えると、今行政上の予算というのはヘルスの保健でもありますし、介護保険でも、障害でも、子供関係でも、色々な地域づくり系の予算が落ちてきていて、ケア領域のものについては去年の3月に一体的に使えますという通知が出されていますが、でも実際にはケア領域だけでも縦割りになっているものがありますけれど、それを超えて、商店街の振興とか、あるいは社会教育とか、色々な意味で地域づくり系の予算は多部局におりてきていると思うのです。

これを包括的に地域づくりに向けて使うことができる、ただし、どのような社会的な価値が生まれているのかを明らかにするといったような社会的なインパクト評価の考え方も踏まえた形での予算の包括的な配分のあり方。新たにつけるのではなくて、より効果的な形での予算のつけ方のようなものも、一歩、都が進めていただけるととてもほかの都道府県にとっての範にもなるのではないかと思います。

後半コメントで、前半質問ということで、お願いいたします。

**【鈴木副座長】** ありがとうございます。せっかくですから、まとめてご質問というか、コメントをいただこうと思うのですが、ほかにはありますか。よろしいですか。

色々なコメントがあったと思いますけれども、大きくは行政に対して何を期待するか。それは規制の面であってもいいと思いますし、あるいは予算的な面であってもいいと思いますし、あるいは、このようなことはやってほしくないとか、逆規制的な話でも結構でございますので、何か思い浮かぶものがありましたら、それぞれコメントをいただければと思います。

では、徳田様からよろしいですか。

**【徳田氏】** では2点。乗竹さんからのコメントなのですが、規制的なものなのですが、例えば町田市で、先ほどご紹介したようにホンダで洗車をしたり、認知症カフェで活動したりという活動をしているのですが、実は一部ではやっているのですが、町田市内の色々な介護事業所に声をかけると、うちの事業所はできないのですと。介護保険制度上、デイサービスから出てはいけないのですとか、地域に活動しにいくと色々ケアプラン上問題があるのでだめですといわれるところが非常に多いのです。

これは2つありまして、1つは制度上、介護保険制度でケアプランを立てた時に、外に出ていいかというようなことを、どのように規定するかというようなテクニカルな話があるのですが、でも実際はやっている所があるので、できなくはないのですが、かなり工夫しないとできないということで、そういったことに対する解釈の問題が1つあるのかなと。

2つ目は、先ほどご紹介したのは、文化的な側面というか、堀田先生もおっしゃったように、介護保険サービスの対象になっている人が何か地域で働くとか、貢献するというのはいかがなものかというような、誰も声高には言わないのですが、そのような雰囲気は実はありまして、お世話になっている人が誰かのお世話をするというのは、どういふことなのだというところが結構じんわりと各セクターにありまして、その辺の部分が

法律の解釈のようなところと文化的なところが相まって、なかなか難しい現状があるというのが、町田市などで起きていることかなと。

そこで行政に期待することとしては、実はこのようなことは大丈夫なのですということを書いていただくというか。別に新たな施策をするというわけではなくて、このような事例があつて、これはできるのですとはっきり書いていただくというのは、多分1つ大きな役割としてはあるのではないかと思います。

特に文化的な側面については、なかなかすぐには変えにくいのですけれど、事例を共有する中で、世話になっている人も、逆に地域の中で何か貢献できることがあるのだというあたりは、変えていける部分があるのではないかと思います。

それから、堀田先生からのご質問で、アクションサイクルを回していくためにはというところなのですが、1つは、効果をどのように測定して回していくかというところが非常に大事なかなと思うのですが、今日発表された方、本当すごく共感する部分が多かったのですが、なかなか効果が測定しにくいというのが1つあるのかなと。例えば、にぎわいがあるというのを、どのようにはかるのかとか、社会的ソーシャルキャピタルがどう上がったのかをどのようにはかるか非常に難しく、結局何とか講座を何回しましたというようなアウトプットの指標に寄ってしまうことが非常に多いのかなと思うのです。そこに対する考え方の転換は必要かなというのが1つです。

あとは、ほど良い距離感のゴール設定といいますか、田中さんのお話を聞いて非常に面白いなと思ったのは、ベンチを何個つくるというのは、すごく分かりやすい。ベンチを2,000個つくるか、何かそのようなことは大事だなと。

今日、私がお話ししたテーマでいうと、例えば認知症の方、軽度の方が中心になるかもしれませんが、認知症の方が今、現状で外出している割合がこれぐらいだとしたら、それを2倍にしようというような、認知症になってもどんどん買い物して、映画館に行つて、ショッピングモールに行こうよというような数値設定のようなものはありかなと。それをするために各セクターがどのようにできるのかというようなところに持っていけると、それをするために、では、どのようなことができるのかとうように落ちていくので、あまりアウトプットの指標に寄らないで、ゴールの設定の指標のようなところに持っていくと、そこに対する各セクターのモチベーションが持続できるのかなと感じました。

お答えになっているかどうか分からないのですが、ありがとうございました。

**【鈴木副座長】**      ありがとうございます。

【中川氏】

変えてほしいなと思うことは、僕は会社でずっと人事をやっけていまして感じることは、大企業と行政に多く見られる定期的な人事異動が難しいなと。ものをつくろうとする人にとっては、そのクライアントがいなくなるということは相当なダメージでして、異動があると、新任者は何から始めるかという前任者の否定から入ることが多いように感じます。結局提案したことが3カ月、半年、否定のおつき合いをする。もう1回肯定に持っていかなければいけないという徒労が半年ロスタイムで起きる。そうすると、任期1年の中の半年はそこに使われてしまうので、この半年、ポジティブなことに使わせてもらえれば、もっといいものがつくれるのにと、もったいないですし、あと、専門家が育たないというのが根本的な問題だと思います。

行政にデザインが分かる人が少ないというのが大きな課題なので、結局意思決定ができない。そうすると、誰からも突っ込まれない無難なものになる。なので、田中さんがおっしゃっているような、街並みが全くつまらない無難なものになるというのが大きいので、デザインの分かる方が自分の責任でやったらいいのではないかと思います。行政の人事も、やりたい人がやるというのが僕は一番いいのではないかと。公園をつくりたい人は公園課に行く、住宅をやりたい人は住宅課に行く。結果が出なかったら尻を拭くというシンプルな形にしていだけると、すごくやりやすいなとは思っています。

【乗竹委員】 今、医療の世界でチーフメディカルオフィサーという概念や、チーフサイエンスオフィサーというのがイギリスをはじめとしてありますけれど、チーフデザインオフィサーというようなものが東京都とかで出てくると、面白いかもしれないですね。

【田中氏】 もろかぶりなのですけど、デザインです。よく、ものよりことというようなことをいう人がいますけれど、本当にばかなのではないかと考えています。

お年寄りや、身体的あるいは社会的弱者の方が、ここにいるべき、ここにいなさいと押し込められる場所に対して、何が嫌かという、くそださいことが嫌なのです。子供向けもそうです。みんな花を見れば美しいと思うし、夕日を見れば美しいと思う。そのような感性のある人間なのに、どうしてこれほどださいのかなと、いつも思っけていまして、私はさまざまな人が積極的にそこに応援に行きたい、子供であれば、自分のおじいちゃん、おばあちゃんに会いに行きたいと思えるためには、面白いことがあるよとか、おやつをくれるよという以上に、何か居心地がいい場所だと、そこにいて楽しいと思える環境が必要だと思っています。

お金をかければいいということではないのです。お金をかけなくても、良いデザインというのはいくらでもあるので、デザインに対しては、特に高齢者ですとか福祉を考える上で切り離せない話だと思っています。それについてのアシストは、是非行政の方をお願いしたいと思うことです。

なくしてほしいルールも、ベンチをまちの中に置くということを社会実験でやっていまして、偉い人は、いいねと言うのです。でも、ちょっと偉いぐらいの人になるとだんだん厳しくなってくるのです。だめだと言います。警察の方は安全のことを重視されるので、避難どうするのだとおっしゃるし、色々な方の足並みがそろっていないのです。

1つのことに対して、私たちが大まかに行政と考えている方に当たった時に、これだけ違う反応をされると思いませんでした。なので、何か1つ、これをやろうよと決めた時、足並みをそろえていただくような応援を是非してほしいということです。

私、喫茶ランドリーという、先ほどご紹介しました喫茶店をやっている、何をしたかということ、市民がやること全部許しているのです。全部許すとどうなるかということ、行政の方ですとか、大きな企業さんは絶対やらないのです。管理が面倒くさくなると、みんな思っているのです。でも、許せば許すほど得られる豊かさも、私は大きいことが実証してよく分かっています。

真っ白なキャンバスに自由に描いていいよといったらぐちゃぐちゃになってしまうかもしれないですけど、ちょっとした下絵、ちょっとした補助線を引くことで、そこでは楽しいから、ここを大事に使おうとか、そこはみんなで使おうよという足並みといいますか、自然発生的な秩序が生まれることも分かってきました。

なので、どうか禁止だけが管理のしやすさと比例すると思わないで、そこは見直してほしいなと思っています。

以上です。

**【鈴木副座長】** 大変示唆的なお話。

**【林委員】** 連続的なアクションサイクルをどうつなげていくかというところで、今日のプレゼンテーションを聞いていても、本当にユニークな問題意識を持って、それぞれの活動が個から起こってきているので、それを支える仕組みをつくる側は、自分たちでそれをつくろうとするのではなくて、それを支える、見つけてくる。今回のように来てもらうのもそうですし、今回の懇談会でも、何をやりましょうかという時に、方針をつくってしまう前に、無数で起こっているアクションをまずいっぱいサーチをしてきて、その分析

をすることが重要なのと、それはアクション。その人たちはアクションを続けるのだけれど、どうそれを加速することができるかという時に、XSでルールを変更していく必要はあるかなと思っていて、仕組み的には私はグランドレベルを変えていくというのは、東京のまちづくりの中でもものすごく有効な手法だと思うのです。しかもそれをコミュニティづくりというものとやった時に、ちょっとしたバイトのような形で、フルタイムとかパートタイムという話ではなくて、ちょっとやってあげるとか、余った料理を3人分ではなくて10人分つくってあげて、ちょっと売るという時に、仕組みは、すぐにそれは商業で、要は売るという行為はビジネスですというのです。そうすると、このエリアは住宅なので、ビジネスは許されていませんとか、色々なルールが出てくる時に、これから起こってくるものは全部ルールを横断する形の取組が起こってくるので、大きな新しい高齢化社会に向けてのまちづくりという中で、小さい単位で、東京都全部のルールではなくて、XSで目的のために実験的に支えていくという、そちら側は間違いなく東京はやれることで、それがどのようなニーズがあるかは、本当に100やっている人がいたら、100違うことを言うのですけれど、その100を1個ずつ確認、やらせてあげないことには変わっていかない気がしていて、なので1,000のルールの中に当てはまらない活動を見つけるぐらいの気持ちでやるのが、サイクルとしてつなげていく仕組みなのかなと個人的に思いました。

出合いを増やすのは、まちの1階を変えるしかないのではないかなと思っていて、まちのランドリーもつくってくれましたけれど、まちの台所もつくるべきだし、文化的にはまちでプロのレストランを増やすとか、プロのあれをつくるのではなくて、ちょっと共有するというライトワークというような新しい言葉をつくって、それをまちの中でどう共有していくのかというような言葉づくりが重要になる。

最後に、この懇談会でできたらいいかなと思っているのは、超高齢社会における東京のあり方懇談会というと、きっと東京は暗くて大変なのだろうかと、人間は言葉1つで印象が変わってしまう。前回、園田先生が、まちに認知症の施設をではなくて、まちが認知症のビレッジにというように、「まちが」とやるだけで描くビジョンが変わるので、言葉づくり、価値観づくりで、もっと楽しくなる、ますます楽しさがあって助け合えるというような言葉づくりもできていくと、文化が変わってくるのかなと思いました。

以上です。

【鈴木副座長】 大変すばらしいおまとめをいただいたという感じです。

最後に、黒川先生からお願いいたします。

【黒川座長】 ありがとうございます。実は来週、認知症関係のイベントが4日間続いております。2013年のイギリスのG8サミットで始まったワールド・ディメンシア・カウンシル(WDC)、12回目の会合を東京でやります。イギリスは、徳田さんのようなコミュニティベースでつくっている支援体制が、多分5、6年前までは全国の15%ぐらいだったけれど、2013年頃から75%ぐらいが、政府・NGOも参加しながらカバーされているらしい。だから自発的な活動を促すことが大事。

日本だと、何となくお上に相談、予算をつけて、となりがちです。今日、「公、パブリック」と言っていたけれど、日本でパブリックという意味は「公」「公式」という意味しかない。だけど本当のパブリックというのは「公」の他にもコモンズとかシビルという意味がある。江戸時代のように役所は「お上」の感覚が強い。東京都が中央政府と違うと思うのは、東京都局の人たちは各局を色々横に動いているから、やろうと言えば、タテ割り感が少ない。

霞が関はその点で難しい。なぜか。三菱銀行に入った人は、住友銀行に移れますか。では、日立のエンジニアはどうですか。パナソニックに行けますか。経産省の人は文科省に移れますか。そのような国があると思っているのですか。ないです。ここに問題がある。

「ヨコ」に移れない、年功序列で言いたいことは言えなくて、最終的には神戸製鋼のようになってしまう。現場は分かっている、でもあまり発言していると上がれなくなる。それが常識と思っているところに日本の問題がある。今日、お招きした人たちは、ある思いがあって、自分たちで行動する、NHKをやめるぐらいです。日本社会をつくっているシステムが新卒から入って年功序列が当たり前だと思っているところに問題がある。

今まで何でうまくいっていたか、今までのパラダイムは日本人のいいところ、言われたことはきちんとやるという、それに合っていた。グローバルでデジタル世界になってきたら、今までの社会制度では合わなくなっている。NPOのようなものを行っている人たちが増えてきているのはすごくいいことで、行政はそのような活動をどうサポート、広げることを考えるのが大事です。

10年前の安倍内閣「イノベーション25」では、NPOがこれから大事になると、書いてある。あるミッションを持って、難しいことを色々やって、ある程度の組織的活動になってきたことを横に広げるのを政府がやるのだと書いてある。

今日のような方たちがやっていることは、東京都であれば実現しやすい、区にも協力を求めるとさらにやりやすいものもあるという気がするので、その辺をよく考えて、予算を

つける、規制があれば何とかする。いいことは広げるということを東京がやる。東京には12の姉妹都市がある、ローマとかニューヨークとかロンドン、そのような所とどんどん共有して、広げて行って欲しいです。そこが一番の問題かなと。

このようなことから、あなたたち一人一人の意識が変わってくると、都知事も都民も元気が出てくる。そのような意味では、パブリックというのは、東京でモデルを見せることができる。先ほどの1階の問題もいいし、ベンチもいい、予算ではなくて、このベンチは自分たちの広告をしていいといたら企業も参加すると思うのです。

それからもう1つは、高齢社会だと、みんな今、墓じまいとか色々大変です。例えば、ベンチに家族の名前を書いてもいいとか、歩道のタイルにも名前を入れて、1枚ずつあげますとか、そのような話もいい。ちょっとしたアイデアでいろいろやってみてください。このようなことを広げるのには何をしたらいいかを考えてほしいです。

それから、外の世界といつもつながっているのが大事なので、ぜひやってほしい。どうやってやるかを考える。公務員の皆さんは希望を持って入っている、必ず色々なことが起こる、黒澤明の『生きる』という映画を見て、そのような気持ちを忘れてはいけない。市民のためにいろいろ課題はあるけど、それをどうやるかが、あなたたちの仕事だと思っているので、頑張ってください。私は東京が変われば日本が変わっているのです。実際、今日ここで聞いた話は、実際にすばらしいことがたくさん起こっている、それをどうやって広げるかということ。東京が突き抜ければ、みんなフォローする。是非やってもらいたい。またこのようなセッションをつくっていただけるとありがたいと思っています。鈴木先生、よろしくをお願いします。

**【鈴木副座長】** ありがとうございます。

今日は大変密度の濃いお話を、しかも大変建設的にやっていただいたと思いますので、是非東京都も、小さく仕事をこなすというのではなくて、結構大きな宿題をいただいたと思いますので、大きく我々の仕事のやり方自体をどう変えるかということも含めて考えていきたいと思います。

それでは、事務局から最後に事務連絡をお願いいたします。

**【堀計画担当課長】** 皆様、ありがとうございます。事務局からご連絡いたします。本日の議事録につきましては、後ほど確認させていただきたいと存じます。また、次回の開催日時につきましては、追ってご連絡させていただきます。

机上に配付いたしました冊子につきましては、そのままお残してください。その他の配付

資料につきましては、お持ち帰りいただいて結構ですが、郵送を希望される方につきましては、封筒の中に入れておいていただければと思います。

以上となります。

本日はどうもありがとうございました。

— 了 —